劉師培『経学教科書』訳注（七）

井澤　耕一

第十八課　三国南北朝隋唐之詩学

東漢之末、説『詩』者、咸宗毛、鄭。自魏王肅作『詩解』、述『毛伝』以攻『鄭箋』、蜀儒李譔作『毛詩伝』亦与『鄭箋』立異。惟呉人陸璣作『毛詩草木鳥獸虫魚疏』、詳于名物、有考古之功。及晋永嘉之乱、『斉詩』淪亡、惟韓、魯之説僅在。晋董景道兼治『韓詩』。当南北朝時、『毛伝』『鄭箋』之学行于河北。通『毛詩』者、始于劉献之、献之作『毛詩序義』、以授李周仁、程帰則、帰則伝劉軌思、周仁伝李鉉、鉉作『毛詩義疏』。又劉焯、劉炫咸従軌思受『詩』、炫作『毛詩述義』。而河北治『毛詩』者、復有劉芳、沈重、『毛詩義』『毛詩音』。楽遜、『毛詩序論』。魯世達、『毛詩章句義疏』。大抵兼崇毛、鄭。以上北学。江左亦崇『毛詩』、晋王基駁王申鄭、孫毓作『詩評』、評論毛、鄭、王三家得失、多屈鄭祖王、而陳統復難孫申鄭、王、鄭両家互相掊擊、然咸宗『毛伝』。若伏曼容、『毛詩義』。崔靈恩、『毛詩集注』。何胤、『毛詩総集』『毛詩隠義』。張譏、『毛詩義』。顧越、『毛詩傍通義』。亦治『毛詩』、于鄭、王二家亦間有出入、惟周続之作『詩序義』、最得毛、鄭之旨。以上南学。及唐孔穎達作『詩義疏』、亦兼崇毛、鄭、引申両家之説、不復以己意為進退、守疏不破注之例、故『毛詩』古義頼以僅存、而魯、韓遺説不可復考矣。又唐人治『詩』者、有成伯璵『毛詩指説』、間以己見説経、以『詩序』為毛公所続、北朝沈重已有此説。遂開宋儒疑『序』之先。此三国、六朝、隋、唐之『詩経』学也。以上用『三国志』『晋書』『南史』『北史』各列伝、『経典釈文』『四庫全書提要』『経義考』及『蛾術編』。

〔現代語訳〕

後漢の末、『詩』を解釈した者は、皆な毛氏、鄭氏を尊崇した。魏の王肅が『詩解』を著し、(1)『毛伝』を祖述することにより、『鄭箋』を批判して以降、蜀の李譔も『毛詩伝』を著し、『鄭箋』と異なった説を立てた。(2)ただ呉の陸璣だけが『毛詩草木鳥獸虫魚疏』を著し、(3)名物学に詳しく、古代の事柄を考証する上で功績があったのである。西晋末に永嘉の乱が起こると、『斉詩』は亡び、韓、魯詩の詩説のみ僅かに存在するだけとなった。(4)西晋の董景道は『韓詩』もひとしく研究していた。(5)南北朝期には、『毛伝』『鄭箋』の学が河北に広まった。『毛詩』に通暁した学者は、劉献之に始まり、献之は『毛詩序義』を著して、(6)李周仁、程帰則に授けた。そして帰則は劉軌思に、周仁は李鉉に伝え、鉉は『毛詩義疏』を著したのである。(7)

© 2011　茨城大学人文学部（人文学部紀要）

また劉焯、劉炫は共に軌思に従って『詩』を伝授され、炫は『毛詩述義』を著した。[8] 河北において『毛詩』を研究した者として、劉芳、沈重、『毛詩義』『毛詩音』。[9] 楽遜、『毛詩序論』。[10] 魯世達、『毛詩章句義疏』。[11] がおり、彼らはおおむね毛、鄭注をひとしく尊んだ。以上が北学についてである。南朝も『毛詩』を尊崇しており、西晋の王基は王肅説に反駁して鄭玄の解釈を主張した。[12] また孫毓は『詩評』を著し、毛、鄭、王三家の得失を論じたが、おおむね鄭説に従い、かつ、王説を祖述していたので、[13] 陳統は孫説を非難し、鄭説を主張したのである。[14] このように王、鄭の両学派は互いに非難しあっていたが、結局双方とも『毛伝』を尊んでいたのである。例えば伏曼容、『毛詩義』。[15] 崔靈恩、『毛詩集注』。[16] 何胤、『毛詩総集』『毛詩隠義』。[17] 張譏、『毛詩義』。[18] 顧越、『毛詩傍通義』。[19] は『毛詩』を研究したが、鄭、王二派に対してはまままくい違いがあった。ただ周続之だけが『詩序』を著して、毛、鄭の真意を最も理解していた。[20] 以上が南学についてである。唐の孔穎達が『詩義疏』を編纂した際、[21] 毛、鄭説ともに尊崇され、両家の説は広く説かれるようになった。そのため個人の考えで解釈されず、「疏は注に矛盾しない」という姿勢も守られ、結果として『毛詩』の古い解釈は幸いにも僅かに残ったが、『魯詩』、『韓詩』の遺説はこれ以上考証することは不可能となってしまった。唐代の人が『詩』を研究した書として、成伯璵の『毛詩指説』がある。[22] この書はままま個人の見解で経書を読み解き、『詩序』を毛公が（子夏の）後を継いで作成したものと主張して、北朝の沈重は早くからその説を主張していた。宋代の儒者が『詩序』を疑った先鞭となった。以上が三国、六朝、隋、唐の『詩経』学である。『三国志』『晋書』『南史』『北史』の各伝、『経典釈文』『四庫全書提要』『経義考』及び『蛾術編』に拠った。

〔注釈〕

（1）『経典釈文』序録には『毛詩』王肅注二十巻が著録され、「魏の太常王肅更に毛を述べ、鄭を非る」とある。

（2）『三国志』巻四十二蜀書李譔伝には、「古文『易』『尚書』『毛詩』『三礼』『左氏伝』『太玄指帰』を著す、皆な賈、馬に依準し、鄭玄に異なる。王氏と殊に隔ち、初め其の述ぶる所を見ざるも、意の歸するは同じきを多くす」とある。

（3）陸璣、字は元恪、呉郡の人。呉の太子中庶子、烏程令となった。『隋書』経籍志・経部詩には『毛詩草木虫魚疏』と著録されている。この書は、『詩』に登場する動植物を解説した書である。

（4）『経典釈文』序録には、「斉詩久しく亡び、魯詩は江東に過ぎず、韓詩は在ると雖も、人の伝うる者無し」とある。

（5）『晋書』巻九十一儒林伝には、「董景道……『春秋』三伝、『京氏易』、馬氏尚書、『韓詩』に明るく、皆な大義を精究す」とある。

（6）劉献之は、博陵饒陽の人。『魏書』巻八十四儒林伝には「献之は『春秋』『毛詩』を善くす」とある。また同伝には『注毛詩序義』一巻が著録されている。

（7）劉献之に始まる『毛詩』の伝授に関して、『北斉書』巻四十四儒林伝序言には、「毛詩に通ずる者多くは魏朝の博陵劉献之より出で、献之は李周仁に伝え、周仁は董令度、程帰則に伝え、帰則は劉敬和、張思伯、劉軌思に伝う」とあり、本文とは異なっている。また『北斉書』儒林伝には、「李鉉……『孝経』『論語』『毛詩』『三礼』義疏及び『三伝異同』『周易義例』合せて三十余巻を撰定す」とある。

（8）劉焯、字は士元、信都昌亭の人、劉炫、字は光伯、河間景城の人。『北史』巻八十八儒林伝には「（劉焯）少きとき河間の劉炫と盟を結びて友と為し、同に『詩』を同郡劉軌思より受く」とある。『隋書』経籍志・経部詩には、劉炫『毛詩述義』四十巻が著録されている。

（9）『隋書』経籍志・経部詩には、北魏の太常卿劉芳撰『毛詩箋音證』十巻、蕭歸散騎常侍沈重撰『毛詩義疏』二十八巻が著録されている。

(10)『周書』巻四十五儒林伝には「（楽遜の）著する所は『孝経』『論語』『毛詩』『左氏春秋序論』十余篇なり」とある。
(11)『隋書』巻七十五儒林伝に「余杭の魯世達、煬帝の時国子助教と為り、『毛詩章句義疏』四十二巻を撰し、世に行わる」とある。
(12)王基、字は伯輿、東萊曲城の人。『経典釈文』序録には、「王肅に駁し、鄭義を申ぶ」とある。なお『隋書』経籍志・経部詩には、（三国）魏司空王基撰『毛詩駁』一巻が著録されている。
(13)『経典釈文』序録には、「晋の豫州刺史孫毓、『詩評』を為り、毛、鄭、王肅の三家の異同を評するも、王を朋とす」とある。
(14)『経典釈文』序録には、「徐州の従事陳統、孫を難じ鄭を申ぶ」とある。
(15)『梁書』巻四十八儒林伝には「伏曼容……『周易』『毛詩』『喪服集解』……を為る」とある。
(16)『隋書』経籍志・経部詩には、梁桂州刺史崔靈恩『集注毛詩』二十四巻が著録されている。
(17)『梁書』巻五十一の本伝には、『毛詩総集』六巻、『毛詩隠義』十巻が著録されている。
(18)『陳書』巻三十三儒林伝には『毛詩義』二十巻が著録されている。
(19)『陳書』儒林伝には、「顧越……毛氏『詩』を説きて、異義を傍通す」とあり、劉師培が書名としたのは誤りか。
(20)『経典釈文』序録には、「宋の徵士雁門周続之……『詩序義』を為る」とある。
(21)『五経正義』の一つである『毛詩正義』は毛伝、鄭箋が採用され、孔穎達等によって疏が作成された。
(22)『新唐書』芸文志・甲部経録詩類には『毛詩指説』一巻が著録されている。

第十九課　三国南北朝隋唐之春秋学

三国之時、治『春秋』者、有魏王肅『左氏解』、蜀李譔『左氏伝』、而尹默、来敏咸治『左氏』、『公』『穀』之学漸衰。晋杜預作『左伝注』、乾没賈、服之説、復作『春秋釋例』、亦多忤誤。又有京相璠作『春秋土地名』。当南北朝時、服虔『左氏注』行于河北。徐遵明伝服注作『春秋章義』、伝其業者有張買奴諸人、杜注得預玄孫杜垣之伝行于斉地、故服、杜二家互相排撃。李鉉、劉焯咸宗服注、衛冀隆亦申服難杜、姚文安則排斥服注、李献之復申服義以難之、周楽遜作『左氏序義』、亦申賈、服排杜注。若夫劉炫作『春秋述異』『春秋攻昧』、並作『春秋規過』、而張仲亦作『春秋義例略』、咸与杜注立異。以上北学。江左偏崇杜注、間用服注。惟梁崔靈恩作『左氏経伝義』申服難杜、虞僧誕復申杜難以答之。以上南学。唐孔穎達作『義疏』専用杜注、而漢学尽亡。三国以後、『公羊』学盛行河北、徐遵明兼通之。江左則『公』『穀』未立学官、惟賀循請立三伝、沈文阿作『三伝義疏』、並及『公羊』。説『穀梁』者、有唐固、糜信、孔衍、江熙、程闡、徐先民、徐乾、劉瑶、胡訥十数家、范寧集衆家之説成『穀梁集解』。及唐徐彦作『公羊疏』以何休『解詁』為主、楊士勛作『穀梁疏』以范寧『集解』為主、而趙匡、啖助、陸淳　作『春秋集伝纂例』『春秋微旨』。掊擊三伝、以己意説経、別成一派。此三国、六朝、隋、唐之『春秋』学也。　以上用『三国志』『晋書』『南史』『北史』各列伝、『経典釈文』『経義考』『蛾術編』。

〔現代語訳〕

三国時代、『春秋』を研究した書として、魏の王肅の『左氏解』(1)蜀の李譔の『左氏伝』があり、(2)また尹默、(3)来敏(4)も『左氏』を研究して、結果『公羊』『穀梁』の学は次第に衰えてしまった。晋の杜預は『左伝注』を著して、賈逵、服虔説を剽窃し、さらに『春秋釋例』を著したが、誤りが多い。(5)客京相璠は『春秋土地名』を著した。(6)南北朝

時代には、服虔『左氏注』が河北に広まり、徐遵明は服注を伝えて『春秋章義』を著し、それをさらに伝えた者として張買奴などがいた。[7] 杜注は預の玄孫、杜垣が斉の地に伝え、そのため服、杜の二学派は互いに相手を攻撃したのである。李鉉、劉焯は服注を尊び、[8] 衛冀隆も服注を主張することにより杜注を批判した。[9] 姚文安は服注を批判したが、李献之は服虔の解釈によって杜注を批判し、[10] 北周の楽遜は『左氏序義』を著し、[11] これもまた賈、服注を主張することにより杜注を排したのである。劉炫は『春秋述異』『春秋攻昧』並びに『春秋規過』を著し、[12] さらに張仲も『春秋義例略』を著したが、[13] 全て杜注に異議を唱えていた。以上が北学についてである。南朝は杜注を偏重したが、まれに服注を用いている。ただ梁の崔靈恩だけが『左氏経伝義』を著して服注を説き杜注を批判した。[14] それに対して虞僧誕は『申杜難服』を作成して崔靈恩に反論している。[15] 以上が南学についてである。唐の孔穎達が『義疏』を作った際、杜注のみを用いたので、漢学は尽く滅んでしまった。[16] 三国以後、『公羊』学が河北で盛行し、徐遵明は『公羊』学にも通じていた。南朝では『公羊』『穀梁』は学官に立てられなかったが、西晋の賀循は三伝を立てることを要請し、沈文阿は『三伝義疏』を著して、それぞれが『公羊』に言及している。[17] 『穀梁』を解釈した者として、唐固、糜信、孔衍、江熙、程闡、徐先民、徐乾、劉瑶、胡訥など十数家がおり、范寧は多くの学者の説を集めて『穀梁集解』を編纂した。[18] 唐代に入って徐彦は『公羊疏』を著した際、何休『解詁』を主とし、楊士勛は『穀梁疏』を著した際、范寧『集解』を主とした。ただし趙匡、啖助、陸淳『春秋集伝纂例』『春秋微旨』を作った。[19] は三伝を攻撃し、個人の見解で経を解釈し、別に一派を形成したのである。[20] 以上が三国、六朝、隋、唐の『春秋』学である。『三国志』『晋書』『南史』『北史』各伝、『経典釈文』『経義考』『蛾術編』に拠った。

〔注釈〕

(1) 『経典釈文』序録には王肅注三十巻が著録されている。
(2) 第十八課注（2）参照。
(3) 『三国志』巻四十二蜀書尹黙伝には「尹黙、字は思潛、梓潼涪の人。又た専ら『左氏春秋』に精しく、劉歆の條例より、鄭衆、賈逵父子、陳元、服虔の注説にいたるまで、咸な略ぼ誦述し、復た本に按ぜず」とある。
(4) 『三国志』巻四十二蜀書来敏伝には「『左氏春秋』を善くす」とある。
(5) 『晋書』巻三十四杜預伝には「『春秋左氏経伝集解』を為る。又衆家の譜第を参考し、之を『釈例』と謂う」とある。
(6) 『隋書』経籍志・経部春秋には、晋の裴秀客、京相璠等撰『春秋土地名』三巻が著録されている。
(7) 『北史』巻八十一儒林伝序言には「河北の諸儒能く春秋に通ずる者は、並びに服子慎の注する所にして、亦た徐生の門より出ず。張買奴、馬敬徳、邢峙、張思伯、張奉礼、張彫、劉昼、鮑長宣、王元則は並びに服氏の精微を得」とある。
(8) 『新唐書』芸文志・甲部経録春秋類には李鉉撰『春秋二伝異同』十一巻が著録されているが、劉焯が著した『春秋』関連の著籍は見当たらない。
(9) 清の銭大昕は『廿二史考異』巻四十において「衛覬は蓋し冀隆なり。……国子博士、遼西衛冀隆、服氏の学に精しく、上書して杜氏『春秋』の六十一事を難ず」と考証している。
(10) 『北斉書』巻四十四儒林伝「又た姚文安、秦道静有り、初め亦た服氏を学ぶも、後に更えて杜元凱の注する所を兼ねて講ず」の記述に拠る。
(11) 本文の「李献之」は「李崇祖」の誤りか、『北史』儒林伝に「（李）崇祖服氏を申明し、名づけて『釈謬』と曰う」とある。
(12) 『周書』巻四十五儒林伝には楽遜の著として『左氏序義』が著録されている。
(13) 『北史』巻八十二儒林伝には、劉炫の『春秋』に関する著作として、『春秋攻昧』

十巻、『春秋述議』四十巻のみが著録されている。本文の「異」は「議」の誤まりか。

(14)『隋書』巻七十五には張沖の伝が収められており、また経籍志・経部詩には、陳右軍將軍張沖撰『春秋義略』三十巻が著録されている。本文の張仲は張沖の誤りであろう。

(15)『梁書』巻四十八儒林伝には彼の著作として『左氏経伝義』二十二巻が著録されている。『隋書』経籍志には、崔靈恩の『春秋』に関する著作として、『春秋経伝解』六巻、『春秋申先儒伝論』十巻、『春秋左氏伝立義』十巻、『春秋序』一巻が著録されている。

(16)『梁書』儒林伝「時に助教の虞僧誕有りて又た杜学に精し。因りて『申杜難服』を作りて、以て靈恩に答う」の記述に拠る。

(17)『五経正義』の一つである『春秋正義』は杜預注が採用され、孔穎達等によって疏が作成された。

(18)賀循は三伝を立てることを要請したことについては典拠不明。『陳書』巻三十三儒林伝には、沈文阿が「博く先儒異同を採り、自ら義疏を為り、三礼、三伝を治む」を行っていたと記されている。

(19)『春秋穀梁伝注疏』序「『穀梁伝』を釈する者十家に近しと雖も」の疏には「十家に近しとは、魏晋已来、『穀梁』を注する者に尹更始、唐固、麋信、孔演、江熙、程闡、徐仙民、徐乾、劉瑤、胡訥（之）等有り、故に十家に近しと曰うなり」とある。

(20)『公羊疏』の作者について、劉師培が参考文献として挙げた『蛾術編』巻七は「公羊の疏は必ず徐遵明の作なり」と主張しているが、劉氏はそれには与していない。

(21)趙匡、字は伯循、河東の人。伝は『新唐書』巻二百儒学伝参照。著作に『春秋闡微纂類義疏』があり、『宋史』巻二百二芸文志・経類春秋類には十巻として著録されている。
啖助、字は叔左、趙州の人。伝は『新唐書』儒学伝参照。著作として本伝中に『春秋集伝』『春秋統例』が著録されている。
陸淳、別名陸質、字は伯沖、呉郡の人。自注に引用されている『春秋集伝纂例』『春秋微旨』は『新唐書』芸文志・甲部経録春秋類に著録されている。

〔訳注者後記〕

本稿は清末の学者、劉師培が著した『経学教科書』第一冊第十八課及び第十九課を現代語訳し、注釈を加えたものである。凡例は「劉師培『経学教科書』訳注（一）」（茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』第4号、二〇〇八年三月）に従う。

なお本訳稿は平成二十二年度～二十四年度科学研究費基盤研究(c)（課題番号二二五二〇〇四一）の研究成果の一部である。